



古壺新酒

第32号
令和元年6月10日

日本伝統俳句協会
北信越支部長
瀬在光本

題字 安原 葉
ホトトギス同人会長

ご挨拶

日本伝統俳句協会北信越支部長

瀬在光本

皆様におかれましては、日頃から本会へのご理解とご協力を戴いておりますこと深く感謝申し上げます。

さてこの度、伝統ある会報の題名を改めさせて頂きたく存じますがその趣旨を述べさせて頂きます。

この会報は、平成四年十月五日に日本伝統俳句協会北信越支部の会報「北信越」として発刊されて二十七年を経過しようとしております。折しも日本伝統俳句協会が発足して五周年を迎えた年に、当時の北信越支部長の今村青魚様や多くの先輩関係者のご尽力により、当時の北信越支部長はこの会報が発刊され、文字通り伝統のある会報となりました。

この度、この伝統のある会報の題名を新たに變更させて頂きました。近年、会員の高齢化等もあり、会員数が減少傾向にありますことを考え、ここで活動全体の時代に合わせた見直しを図り、現在大きな課題となっております。その一環として、この会報もこれまでの会員のみならず、新たな会員勧誘の一助になるような内容も折り込んだものにしていきたいと思っております。

この度の新しい題名の「古壺新酒」は、皆様ご周知のように虚子先生の俳句理念の一つに、「俳句は容器としては古い壺（形式）に花鳥諷詠（提唱昭和三年）という新しい酒（内容）を盛る」と昭和五年（一九三〇年）に提言されたものです。

この四字熟語は、虚子先生の造語だそうですが、私たち伝統俳句を旨とする者たちにとって俳句作りの原点であり、常に心に刻んでおくべき言葉ではないかと考えこの題名といたしました。

どうかこれを機に会員の皆様が一層俳句に親しみながら研鑽されますことをご祈念申し上げますと共に、新しい会員づくり、仲間づくりはこの会報をお役に立てていただければ幸いです。

深は新なり・古壺新酒

高浜 虚子

（虚子俳話）

若い血気に燃えた人々は何か新しい仕事をしたという欲望に燃えているであります。俳句というような窮屈な天地に入ってなお新しい試みをしたという若い人々は得て十七字という型を破り、季題という鉄の鎖を解こうとするような傾向があるのでありますが、それは俳句を滅ぼし、同時に自分もいつか俳句界の外に立っているようになるのであります。また十七字と季題ということとは守っていても、なるべく境界を広めていつか横さまに新しい方面を見出すとする傾きが若い人々には多いのであります。それも或る点までは結構であります。得てそういう人々はなお俳句らしからざるものを作るといふ弊害に陥り易いものであります。横に拡がろうとすることもまたよろしいのであります。それよりも私は今までの俳句の道をさらに深く深くと志す方がより多く新しいものを得る道だと考えます。深く深くと志して行くことは同じ新しいものでも、一時の新しさではなく、長く生命のある新しさというものを発見する道だと考えます。私はその意味において、深は新なり、即ち深いということが新しいということになる、ということをおねがひ申しております。

俳句は伝統の文芸であります。十七字、季題という極端な制限がある限り根底からそう新しいことが出来るものではありません。いわば古い壺であります。しかしただ今申したように出来るだけ深く深くと探究して行ってその制限内で新しいことを見出して行くことを心掛けます。古い壺に盛る新しい酒を醸すことを志して行きます。私はこの事を「古壺」古い壺、「新酒」新しい酒、「古壺新酒」を称えています。

深は新見るから観るへ明易し

京都 安原 葉

ホトトギス 平成十五年十二月一日発行（第百六卷第十二号）

俳句会



第七十三回虚子記念姥捨観月句会

平成三十年九月十日、千曲市姥捨・長楽寺で開催されました。小諸に疎開中だった虚子が、月の名所として知られる更埴姥捨の月を観るため、地元俳人に誘われるまま、年尾、立子を伴い、終戦の年、仲秋の観月句会を催しました。それから七十三年の歳月が経ちましたが、その句会から毎年欠かすことなく、信濃の俳人たちがこの歴史ある観月句会を守り続けています。バスの送迎もあり、長楽寺の手打ちそばは好評です。

当日の入選句

天の水棚田稲穂に配りゆく
みるみるに霧に捲かれゆく棚田
見えぬ月心に描く長楽寺
シナトラのフライトーザムーン姥捨に
霧の這ふ姥捨駅に虚子句碑に
お月見や座敷の隅に酒の瓶
蟲よ風よスイッチバック仰天す
再会の嬉し月見の始まりぬ
ほつほつの雨にも揺るる釣舟草
落し水姥捨山の過去未来
C Dを手にぶら下げて案山子かな
朝採りの薬味たっぷりざるのそば
姥捨の桂は雨に月を待つ
千枚田絆つなぎて月の友
旨酒の育つ姥捨水の澄む
秋の空とんび一羽の棚田かな
完熟の桃の箱持ち女来る
露草や佛塚のでんと立つ
みな心遠くへ月を待つ夜は

瀬在 光本
川崎 繁子
宮澤 正
勝山 學
山口 芳輝
丸山 ま美
清水 節子
岡山 幸子
井出 節子
清水 順子
野口 昭子
佐藤 恵一
小泉いく子
宮澤 澄明
松本れい子
加藤 公男
宮下 茂
鈴木しどみ

第二十八回芭蕉祭山中温泉全国俳句大会

平成三十年九月十七日、石川県山中温泉で開催された第二十八回芭蕉祭山中温泉全国俳句大会の事前投句の入選句が発表されました。この大会に協力している北信越支部会員の入選は次のとおりです。
(重複入選は一句のみ掲載)

安原 葉選

八月のいま平和なる星に住み
襖みなはづして田舎暮しかな
先行の人見失ふ木下闇
カーテンを替へて目覚のよき五月
一灯の暗きが涼し芭蕉堂
奥宮へ磴百余段木下闇
獣害に捨てし山畑蛇毒
静けさや亀の揺らせし花菖蒲
朝夕に仰ぐ白山青田風
白南風の大きくまはず大風車
三本で足りる二本の茄子植うる
草餅を背負ひ母来しころをふと
露涼し顔くだけの人とゐて
妖精に逢へさう深き森涼し

酒井 孝子
向 佐ち子
小島 藍女
駒形 隼男
本谷眞治郎
伊東弥太郎
駒形 隼男
松本 洋美
谷村 栄子
同
矢木 桂子
同
辰巳 葉流
宮本三重子

梅雨籠り繰返し読む歎異抄
山独活は味噌で囓れと峽の人
水替へるつもりのあると水中花
近づきて離れて句ふ栗の花
逝きし子に供ふ老舗の柏餅
朝光の蕊の先まで曼珠沙華

酒井 孝子
橋本 正乃
本谷眞治郎
向 佐ち子
駒形 隼男
松下 薫

卵子産み海亀に又遠き旅
万緑の底を流るる水しぶき
青嵐むしろ爽快畑に立つ

永井佐和子
小島 藍女
中村 珠栄

「奥の細道」つるが芭蕉紀行俳句大会

北信越支部が協力する「奥の細道」つるが芭蕉紀行全国俳句大会は、平成三十年十月二十一日、講師に坊城俊樹氏を迎えて敦賀市で開催され、その事前投句の入選句が発表されました。北信越支部会員の一人一句抄は次のとおりです。

一人一句抄は次のとおりです。
人恋へば月光の波我に寄す
万緑を裂き一爆の落下かな
月涼し馬籠の宿の石畳
名月を崩して跳ねる池の鯉
家継がぬ子の意志堅し冴ゆる月
暮初むる川床に親しき比叡の灯
夏座敷眠くない児と眠い母
油照り旗振る人に一礼す
定めなき月を見上ぐる芭蕉像
願ひ事多く七夕笹撓ふ
一村を包みきれざる蟬時雨
園長のほどよく日焼けしてをりぬ

鈴木しどみ
今村 征一
山内なるみ
木幡 嘉子
組屋 敏子
本谷眞治郎
為永香月夜
奥 清女
伊東弥太郎
山口やすか
多田みす枝
中山 昭子

日本伝統俳句協会北信越支部

石川県部会研修会

日本伝統俳句協会北信越支部石川県部会研修会は、あらうみ会と共催で四月十日淡墨桜を吟行した後開催しました。当日の根尾地区は季節外れの雪でしたが、駒形隼男顧問の作及び選は次のとおりです。

百本の支柱を伝ふ花の雨
薄墨の花や添木の守る樹齡

駒形 隼男
谷村 栄子

雨雫さへ花の色花心
 はるか来て雪の薄墨桜とは
 花守の春雪折りし枝かつぐ
 花心乗せ満席のバスとなる
 あえかなる花と溶け合ふ名残雪
 たかぶれる人を鎮めて花の雪
 平成の終の花見を根尾谷に
 花と雪色の境を見せぬまま
 花人を震へ上がらす雪の果
 根尾谷の花を守りて観世音
 白銀を纏うて神秘なる桜
 花守の春雪払ふ高梯子
 二度三度身支度変へし花の旅
 名残雪踏み花弁を踏む山路
 雨をつきと見こう見つつ花の旅
 桜守思はぬ雪を払ふ破目
 雪女郎めきて薄墨大樹濡れ
 吟行の膳に小振りの花見団子
 花冷をほぐすお喋りバスの旅
 根尾谷やトンネル抜けて花に雪
 忘れ雪払ふ薄墨桜守
 花惜しみつつ時ならぬ雪を倦む
 老幹に漲る力花大樹
 薄墨の花に再会得たる倅
 そこはかとしずる音立つ花の雪
 薄墨の花に蘇生といふ矜持
 根尾谷に天の悪戯花の雪
 薄墨の花色閉ざし雪の果
 万葉なる花より絶えぬしずり雪
 晴れならば如何にと思ふ花古木
 目的地花に雪とて湧く車中
 花冷の雨雲煙る根尾の谷
 薄墨の花の心を乱す雪

西田 梅女
 中村 曜子
 山城 悦子
 松本 寿憲
 出島 達子
 北 美紀子
 岩本 松江
 中川外代子
 北 重子
 折橋紀与美
 村上 秀吾
 篠島 安子
 小島 藍女
 和沢 靖子
 伊東弥太郎
 矢木 桂子
 西田 梅女
 西田 さい雪
 水橋眞智子
 野崎 進一
 中村 曜子
 松本 寿憲
 西 登美枝
 高堂智恵子
 金子 慶一
 村上 秀吾
 和沢 靖子
 谷村 栄子
 篠島 安子
 篠島 重子
 北 重子
 篠島 安子
 金子 慶一
 小幡 道子

根尾谷の里を鶯ひて花に雪
 満開の華やぎ奪ひ雪の果
 根尾谷の山脈化粧ふ忘れ雪
 淡雪を載せて枝垂る桜かな
 根尾谷の雪籠めとなる花見かな
 薄墨の花に風情の雪の果
 雨意深しこの桜木の幾星霜
 薄墨の色を流して花の雨
 六花も咲かせ薄墨花盛り
 花の雪薄墨色に染まりゆく
 遙か来て花に雪てふまれなる日
 返り寒片付けしもの出して旅
 雨ながら花存分の旅路かな
 春雪の枝に薄墨色確と
 雨に色褪せず薄墨桜かな
 おっとと来し時も斯く雨根尾桜
 遠目にも雨に潤みし花の景

折橋紀与美
 和沢 靖子
 岩本 松江
 西野久仁夫
 堀口 紀子
 向 佐子
 中村 珠栄
 伊東弥太郎
 小幡 道子
 折橋紀与美
 向 佐子
 矢木 桂子
 野村 玲子
 西 登美枝
 伊東弥太郎
 中村 珠栄
 小幡 道子

第二十三回信濃虚子忌俳句大会

平成三十一年四月二十日、長野市生涯学習センターで、席題「生涯」を含め句会が開催されました。

当日の特選句 鈴木しどみ選

春炬燵螺子が弛んでいたりけり
 生涯は一人静のままがいい
 はなびらを払いつつ巻く花筵
 花すみれ立子に逢ひに小諸まで
 パソコンに「生きる」と入力春の闇
 またひとり花びら追ふ子加はりぬ
 四歳と親指折る子穠しまふ
 生涯は紙飛行機よ春は近く
 春愁やお釈迦様の足の跡
 ふらここに仲良し二人脚揃え
 傾けるコーヒーカップチュウリップ

加藤 公雄
 吉澤 萌
 牧野 菊生
 山口 芳輝
 佐藤 恵一
 岡山 幸子
 瀬在 光本
 小池 保子
 宮下 茂
 吉田 洋子
 丸山 まみ

抱擁す古刹の伽藍の江戸桜 大原 彰夫
 ゆつくりと目を開きたる初蛙 中村 弘

日本伝統俳句協会福井県部会だより

△山岸世詩明県支部会長記▽

一、平成三十年十月二十一日(日) 午前九時より午後五時まで
 「奥の細道」つるが芭蕉紀行全国俳句大会開催
 於 敦賀市きらめきみなと館 参加者二二〇余名
 その折り、吟行は氣比神宮等を巡る。(バス三台分)
 その折り、当協会支部長賞の句は次のとおりである。
 兼題 万緑を裂き一爆の落下かな
 石川県金沢市 今村 征一氏に

席題 絵馬堂のがらんどつなる秋の風
 福井県越前市 多田みす枝氏に
 両氏に山岸世詩明県部会長より授与する。大会選者は、大輪靖宏、安西篤、古賀雪江の各先生と地元選者は山岸俳句作家協会会長外八名が当たった。
 次に記念講演が行われ講師は、日本伝統俳句協会常務理事で花鳥主宰の坊城俊樹先生が、虚子の世界、無意味なる俳人の演題で一時間三十分の講演は実のあるお話しを聞けたとの評判であった。

二、平成三十年十一月十日(土) 午前十一時から午後四時まで
 日本伝統俳句協会福井県支部研修会並吟行会を開催。午前十時三十分県下の当会員が、JR鯖江駅に集合し、タクシー等で、越前古窯博物館と天心堂で開催。その一帯は福井県陶芸村やその施設を十四名が晴天の吟行をした。会員の半数近くの人が紅葉句会を楽しみ盛会であった。



日本伝統俳句協会北信越支部

平成三十年思い出の一句

新潟

深秋の鎌倉へ発つ忌日かな 小川 則子
 夫の背を追ふて花野をゆきし日も 大矢あきこ
 春愁や返事をくれぬ犬のこと 関口 智実
 時雨る、や出前を急ぐ軽ワゴン 藤原 哲
 弟よ宇宙目高は帰りしに 関口あや子
 石路の花惚ぶ人またふえにけり 佐藤 文子
 別れ来て又振り返る冬木立 富井千鶴子
 白シヤツや写真の父は我を抱き 田代 草猫
 夫の秘書わが四十年盆迎ふ 榎本清津子
 子規庵に求めし句帳筆始 小川のおこ
 追悼の朧ならざる鐘を聴く 安原 葉
 菜の花や夫と来し日の椅子今も 安井 里子
 逝く春の尾根縫ひ北へ向く一機 青木福太郎
 栄転の君と邂逅風光る 橋詰シズエ
 雪霏々と真昼の街の沈むほど 笠原佐千子
 新盆の墓前に明かす胸の内 桑原 幸子
 九条守り捻り田の国守るべし 木村 杉花
 探查機の涼しく着きし小惑星 内藤 孝
 妻はヨガ吾は吟行風薫る 桑原たかよし
 喪籠の日々に濃くなりきし緑 板垣 柳子
 俯きて風の音聞く芒かな 本間 百果
 終日や畑を居場所と草取女 藤井 敏子

富山

蟬しぐれ四百年の坐禪石 山本 豊作
 有磯海のぞむ磯山若緑 有川 寛
 初霜のくりから峠越えて来し 箕谷 幸子
 境内の鯖鮓小屋の匂ひ立つ 岩城 未知
 濃りんどう黒部は水の韻きあり 高城 玲子
 秋刀魚焼き悦ぶ夫のあるが良し 田上真知子
 秘佛在す古刹に香る白牡丹 寺島 皎
 逆縁のはや一周忌蟬挽歌 窪田富美子
 掌に重くこころ豊かになる稲穂 藤田 百生
 缶ビール暑さ肴にもう一本 井上 大輔
 虫の音やドアホン越しに鑑賞す 坂本 雪峰
 考へる人となり居る秋思かな 北川 越草
 時折に尾の鞭となる昼牛 北川 秀子
 女郎花吹かれ明るさ広げけり 稲田 節子
 陽春を掴み取るよな大櫛 坂井一二三
 海の日の人を吐き出す無人駅 宇波可津志
 風花の空やはらかに揺れ始む 荒木 陽子
 翁道車で来しも露けしや 荒木かづを
 冬へ冬へ駈け出してゐる弥陀ヶ原 片桐 久恵

石川
 挿木より育てし薔薇の卓上に 泉 和子
 跳る影踏んで新樹の風の径 大橋美代子
 白山の裾野に住んで菜を問引く 本谷真治郎
 表札の傾き直し額の花 吉田みはる
 わが里の狭き路地まで祭かな 金子 慶一
 酉の市彼方にスカイツリーの夜 仲谷美枝子
 句心は金風を受く朝より 松田 勲

秋霖やはせをの旅にくらぶれば 中村 曜子
 柔らかな雨の匂に草青む 鈴木 恵子
 秋祭母の赤飯蒸し上がる 中川外代子
 長雨のあがり果てまで稲穂かな 坂井 克子
 星ひとつ宿し滴り光りけり 八百 恵子
 春風やいつか杖持つ身となりて 河越 敏子
 葬送の日を繰延ぶる深雪かな 野村 玲子
 峠道返し上溝桜かな 瀬古 祥子
 洗ひたる硯に向ふ静心 荒谷みえ子
 万緑と瀬音心は無の世界 宮本三重子
 ブラウスの白の眩しき更衣 北川まつ子
 寒風の埧塙に黙しゐる城址 藤浦 昭代
 雪の朝最期の夫やありがとう 澤野 和子
 昨日とは違ふ律律しさ入学児 石名坂房枝
 豆飯を食み饗饗と卒寿なる 永井佐和子
 風染めて松の花粉のとぶ日かな 高堂智恵子
 違ふ音の和して豊かや虫時雨 篠島 安子
 師の歳を越へし米寿の初点前 平田 めみ
 ただ海を見るだけに来し夏帽子 折橋紀与美
 ライラックキャプテンクック邸ならん 西谷 笛秋
 母訪へば草の中より夏帽子 坂下 成紘
 さしのべる子の手にとまる蜜かな 牧野 妙子
 すぐそこに摘める野のあり蓬餅 堀口 道子
 若竹のみな天辺を競ひ合ひ 松本 松魚
 薫風や見えない未来見えてくる 辰巳 葉流
 襖場の石垣に濡れ穴まどひ 辻 文江
 患者らに尾山まつりの祝膳 水上 栄
 歳時記を捲り夜長の友として 岸本佐紀子
 勝山へ国道開通大花野 中田 康子



お地蔵にお礼遂げれば蜻蛉来る
朝掘りを積んで笥直売所
支へられ妻に感謝の明の春
心して寒九の水を甕に汲み
外套をやるはりと脱ぎ華やげる
刻忘れ月花美人の開花待つ
夕虹や童話のやうに少女立つ
活けられし芒にも風見えにけり
にこやかに爽やかに人迎へけり
海の青までも奪ってゆく極暑
尾根あるき突と雲海踏むことに
恋猫の戻らぬ三日待つ三日
山開あの感激を今一度
百回てふ記念の花見句碑の丘
ひとふりを棺の友に新走
春愁や言葉出て来ぬもどかしさ
弓肩に新樹に染まりゆく少女
父の日や父知る人に聞く話
城門へ遠まなざしの春日傘
冷やかに回る轆轤の搔く木目
一葉より色走り出す薄紅葉
橋一つ湯町を抜けし里の秋
なつかしき火色に炉辺の去り難く
啓蟄や佳き昨夜の雨今朝の晴
雪吊の縄は程好きたわみ見せ
睡蓮の世塵を寄せぬ白さとも
身に入むや友の名遣る電話帳
高原の風に人声秋高し
掬はれし海の煌めき螢鳥賊

宮田也寸子
西川 嘉子
伊東弥太郎
東 小夜子
西やすのり
丸田 玉栄
上田千鶴子
西 登美枝
松本 寿憲
向 佐ち子
中村 珠栄
横町 陽子
浅井 和子
松本 慶子
高田 俊彦
村中 久恵
矢木 桂子
岩本 松江
東 澄子
村上 秀吾
小幡 道子
駒形 隼男
和沢 靖子
長徳谷とし
出島 達子
堀口 紀子
谷村 栄子
辻 美智子
広島 明臣

雲滾つ今日は猛暑になりそうな
子等集ひ牛鍋囲む年忘れ
薄氷の山湖を風の鳴り渡る
電飾に蘇る華冬木立
優勝を語る涙と玉の汗
露天湯へ下りる階河鹿鳴く
コート脱ぎ文化遺産にする署名
頂に朝日を受けて霜日和
舟で行く兼六園の松手入
あるがまま生きて百歳秋惜む
三つありて三つの静けさ蟻地獄
虫干や地獄極楽図の絵解
帰省子の手足をひたす日本海
緑蔭にひと息ついて風を聞く

大岸 青夏
西川 忠
北 重子
西野久仁夫
西田さい雪
橋本紀美子
西田 梅女
赤島磨智子
岡村 俊子
政田ますみ
松室美千代
北村 翠波
橋本 正乃
村本寿美枝

福井
平成の最後生き抜く生身魂
国体の男女賜杯秋高し
冬の星消し新興の街明かり
夏芝居袂は涙隠すため
靴ぬぎに紅い鼻緒の祭下駄
お仕置きをされてる犬の寒き顔
初蝶と呼ぶる為に我に逢ふ
縁の日をあつめ紙折る冬の指
宮島の船に乗り込み七五三
昨日飛び今日又飛べる秋の蝶
人生はこれからと言ふ敬老日
何もこの大雪に旅立たずとも
白といふまぶしき色の紙を漉く

山口やすか
高島 松陰
岸本 幸子
山岸世詩明
大久保雪子
奥 清女
村上 雪
下野美智子
堀なでしこ
荒井 龍聲
村中 聖火
山口 霞牛
木幡 嘉子

激流の跡をとどめて川涸れて
大鳥居諸手を挙げて月を待つ
天蓋は秋晴よ左内の忌
遣り水に添ひ黄菖蒲の一ト並び

森田 昇
為永香月枝
田野井かづを
山崎 越堂

長野
雪卸し卸しても又雪卸し
良き予感当ると信じ春を待つ
囀と千曲川の瀬音身をまかせ
落葉掃く齡ひとつを重ねけり
花に霊幹にも木霊根に地霊
帰り花今がこんなに大事とは
謙信の龍や城趾の青嵐
また一人虚子の直弟子鳥雲に
坊守りの馳走のそばやかしこみて
感情も読みとるAIそぞろ寒
牡丹の散る時重さありにけり
電車待つスマホ興じて汗拭い
柳石を囲み小さな草のみぢ
アルプスの風を力と鳥帰る
露の世に大往生といふがあり
裸木の洞は今でも秘密基地
爽やかや麻酔を覚ます妻の声
帽子だけあればルンルン春の雪
りすの尾の走る冬木や尾の走る
卒業子見送っている傷の椅子
最果の地の華やぎて鶴の舞

宮澤 正
小池 保子
佐藤 文子
勝山 学
瀬在 光本
鈴木しどみ
西澤ひろみ
山口 芳輝
野口 昭子
永井 幸子
清水 順子
中山 弘美
川崎 繁子
田中 延子
縣 展子
清水 節子
牧野 菊生
金箱 一世
岡山 幸子
井出 節子
西本 ゆき



日本伝統俳句協会北信越支部決算及び予算

(自 2018年4月1日～至 2019年3月31日)

1. 一般会計

(単位：円)

2018年度決算			2019年度予算	
収入の部			収入の部	
項目	決算額	備考	予算額	備考
前年度繰越金	1,688,490		490,770	
利息	1,261		5	
運営協力金	711,500	2000円×355.75口	650,000	
合計	2,401,251		1,140,775	
支出の部			支出の部	
協力金振込手数料	20,030	ゆうちょ銀行払込	30,000	ゆうちょ銀行払込
会報発行費	77,782	会報31号発行	100,000	会報発行
總會補助金	50,000	福井市	—	
事業報告会及び研修会費	100,000	同上研修	150,000	各県へ補助金 注②
事業協力費	17,852	姨捨、山中、敦賀等	40,000	姨捨、山中、敦賀等
会議費	40,229	役員会旅費	200,000	役員会等
事務費	79,588	郵送料ほか	80,000	郵送料ほか
予備費	25,000	入会補助金5名	50,000	入会補助金
記念事業積立金	1,500,000	注①		
小計	1,910,481		650,000	
次年度繰越	490,770		490,775	
合計	2,401,251		1,140,775	

注① 記念事業積立金1,500,000円は全国俳句大会の準備金などの金額である。

注② 2019年度予算支出の研修費150,000円は、各県の研修補助金で、各県別の金の内訳は、新潟県3万円、長野県3万円、富山県2万円、石川県5万円及び福井県2万円の計15万円。

2. 記念事業積立金

全国俳句大会準備金等 1,500,000円

お知らせ

大会ご案内

●北信越ホトトギス俳句大会

日時 令和元年9月28日(土)～29日(日)
場所 ホテルニューオータニ長岡
紹介先 藤原 哲
電話 025-523-3548

●虚子記念姨捨観月句会

日時 令和元年9月17日(火)
場所 千曲市姨捨 長楽寺
紹介先 鈴木しづみ
電話 026-232-5089

●芭蕉祭山中温泉全国俳句大会

日時 令和元年9月14日(土)
場所 加賀市山中温泉「山中座」
紹介先 伊東弥太郎
電話 076-298-6640

●つるが芭蕉紀行全国俳句大会

日時 令和元年10月20日(日)
場所 敦賀市「きらめきみなと館」
紹介先 中者正機
電話 0770-23-1482

募集 私の一句

北信越支部支部では、昨年までの「思い出の一句」に代わり、今年「私の一句」を募集します。

同封の郵便はがきに記載の上、九月末までに次へお送りください。

○宛 先 〒930-0241

富山市中新川郡立山町道源寺831-1

荒木かづを

伝統俳句協会入会のお誘いにあたり

公益社団法人「日本伝統俳句協会」は、昭和六十二年（一九八七年）現会長稲畑汀子先生のもと「俳句を守りその伝統を正しく継承していこう」という趣旨に賛同する方々によって結成・設立された協会です。

その設立時の思いを次のように語られています。

「俳句人口の増加と裏腹に、どんどん俳句の質が悪くなってきたように思う。おかしい俳句が氾濫し、一般の目からはよい俳句と悪い俳句の区別がつけにくい現在の状況では、初心者は何を信じて勉強すればよいか分からず、いきおいマスコミに名の売れている有名な人の言説や俳句を目安にせざるを得ないだろう。しかし、ブームを当て込んだマスコミと、その周辺の商業主義が横行している「マスコミ俳壇」には虚名の俳人も少なくない。

このような事態を許した俳壇の責任も重いと言わねばならないだ

ろう。

俳壇を意識せず「花鳥諷詠を専らに、平明にして余韻のある句」をこつこつと作り、伝統俳句の現代に通じる新しさを作品をもって実証してきたホトトギスは、今こそ立ち上がって発言すべきだと思う、私の心の中で密かにあたたためつけ自問自答してきた考えを行動に移そうと思う。

私は日本伝統俳句協会を組織することにした。

伝統俳句の薦め

四季によって移り変わる美しい自然と深く関わりながら生活してきた日本人の素晴らしい季節を踏まえた季題、十七音という構成の緊密な美しさ、十七音の背景に省略されたものを余韻として伝えながら長詩も及ばぬ宇宙の姿を定着させる喜び、その為の深く物を含める訓練、これらが全て日本人の伝統的な心の所産に他なりません。

俳句ブームと言っても色んな要素があるでしょう。

しかし基本的には物質文明の前途に不安を感じ始めた日本人が、美しい自然と調和して生きてきた、かつての日本人の心を取り戻そうとし始めたのだと思います。

私の心の底からの伝統俳句の薦めである。

『深は新なり』

「ことばの春秋」稲畑汀子著（永田書房）より



日本伝統俳句協会

北信越支部への協力金

(平成三十年度) 「二〇二〇年」

ご芳名および口数

五十音順・敬称略

(10口) 安原 葉

(5口) 安浄寺勉強会・大平翠人・勝山 学・

香林朝子・駒形隼男・鈴木しづみ・

瀬在光本・高田俊彦・高堂智恵子・

松本松魚・宮本三重子・村中久恵・

安田畝風

(3・5口) 窪田富美子・田上真知子・

寺島 皎

(3口) 中村曜子

(2・5口) 赤島磨智子・飯貝恵秀・

石黒和香子・板垣柳子・伊東弥太郎・

今井芳子・岩城未知・大橋美代子・

岡村俊子・奥 清女・河越敏子・

木村杉花・小池保子・小島藍女・

下野美智子・田野井かづを・長徳谷とし・

富井千鶴子・仲谷美枝子・西田さい雪・

西田梅女・野村玲子・広島明臣・

藤浦昭代・藤原 哲・堀口紀子・

松下 薫・松室美千代・松本慶子・

宮田也寸子・村中聖火・本谷眞治郎・

矢木桂子・山井きなこ・山岸世詩明・

和沢靖子

(2口) 荒谷みえ子・井上大輔・小川則子・

笠原佐千子・川崎繁子・北 重子・

北川越草・桑原たかよし・高城玲子・

辰巳葉流・富永麻子・中川外代子・

中村珠栄・西澤ひろみ・西本ゆき・

藤井敏子・村上 雪

(1・5口) 青木福太郎・浅井和子・

有川 寛・石名坂房枝・泉 和子・

岩本松江・榎本清津子・大島たか子・

大矢アキ子・小川のおこ・折橋紀与美・

金子慶一・北川まつ子・北七喜美子・

熊野雅子・桑原幸子・坂下成紘・

佐藤文子(長岡)・佐藤美春・鈴木恵子・

達 静・谷口由美子・谷村栄子・

辻美智子・西野久仁夫・橋詰シズエ・

東小夜子・東 澄子・藤田暁夫・

牧野菊生・牧野妙子・松平芳子・

水上 栄・宮澤 正・深山トモエ・

向佐ち子・森田 昇・安井里子・横町陽子

(1口) 縣 展子・荒木かづを・荒木陽子・

飯島俊子・井出節子・稲田節子・

今村征一・岩島照子・上田千鶴子・

宇波勝吉・大岸敬明・岡山幸子・

小幡道子・梶井より子・片桐久恵・

金箱一世・岸本佐紀子・岸本幸子・

北川秀子・北村翠波・小泉いく子・

木幡嘉子・小林貞子・小林つくし・

坂井一二三・坂本雪峰・佐野皐月・

佐藤文子(小諸)・澤野和子・篠島安子・

清水順子・清水節子・末政千代子・

瀬古祥子・田代草猫・田中延子・

谷原桂子・為永香月枝・辻 文江・

鶴見昭子・内藤 孝・永井幸子・

永井佐和子・中田康子・西 登美枝・

西川 忠・西川嘉子・西沢かつ子・

西澤直子・西やすのり・野口昭子・

橋本紀美子・早瀬貞子・平田ゑみ・

平野孝純・藤田百生・堀なでしこ・

堀口道子・本田輝代・本間百香・

政田ますみ・松田 勲・松本寿憲・

松本洋美・丸田玉榮・三島由紀子・

水橋眞智子・宮澤久美子・宮下末子・

宮前はやを・宮本博子・村上秀吾・

村本寿美枝・森田康夫・八百恵子・

山口霞牛・山口やすか・山口芳輝・

山崎越堂・山中楠雄・山本豊作・

吉澤 萌・吉田ミハル・吉田洋子

(0・75口) 中山弘美

お願い

北信越支部への協力金

昨年も多くの方からご協力をいただき御礼申し上げます。北信越支部の活動資金は皆様の協力金という名の会費に依っています。今年度も同封の趣旨をご理解いただき、絶大なご協力をよろしくお願い申し上げます。

○協力金 一口 2千円 何口でも結構です

○期 日 9月末日

○振込は 振込用紙でお願いします

振込番号 006501613870

○加入者名 日本伝統俳句協会北信越支部